

都道府県別賞一等

自分を知る

岡山県 岡山県立倉敷天城中学校 三学年

中田 さや

私が「生命保険」と聞いて連想する言葉は、「重い病気」でした。私は保険に入らない、関係ない、そう思っていました。未来の病気を予測しているような恐怖に襲われるのが、怖かったからかもしれません。

「ポリープが見つかった。」先日母に言われたその言葉で、私は背筋が凍るような思いをしたのを覚えています。ポリープとは、ガンの発症に繋がるもの。それが見つかるのは、五十代、六十代の方が多くようで、母のような三十代の人が見つかることは少ないそうです。母はガンになる可能性が高い、そう知った私がそのとき母にかけて言葉は、混乱していて覚えていません。しかし、そんな状況の中の飲み込まれるような恐怖だけは鮮明に覚えています。最近では医療の発達により、ガンで命を落とす人は年々少なくなっていると聞きますが、やはり日本人の中で、悪性新生物、つまりはポリープが悪化したことで亡くなる人が多いです。

母にポリープが見つかったこともあり、家族全員で母のことについて理解を深めるために話し合いました。幸い母のポリープは早く見つかかり、大きなことにはなりませんでしたが、これからは、ガンが見つかる可能性も十分に考えられます。手術や入院の可能性もあり、お金の面でも問題が生じるかもしれないと知ったとき、私はあまり気にしませんでした。母の表情から、家族に迷惑をかけてしまうという心苦しさが読み取れました。母は生命保険に入っていないませんでした。若い頃一度入って、自分は病気になることはないだろうと思ひ、やめてしまったそうです。一度病気が見つかる、生命保険に再度入ることは難しいということを知ることがあります。生命保険は自分を守るために入る、そう母が話してくれたことをきっかけに、私は生命保険に興味を持ちました。

母にポリープが見つかり、他人事だと思っていた「ガン」という言葉を、身近なものとして考えるようになりました。今までと同じような生活を崩したくなくて、目をつむっていた病气。学校で学習したときに比べ、より一層深く、重い言葉として感じるようになりました。冷静に考えると、私には、父方の親戚にも、母方の親戚にも、ガンになっている人が三人います。身近にある「ガン」に気付かなかった私の心の中は、『焦燥に駆られる』という言葉がぴったりだったかもしれません。定期的に受けている健康診断で、両親が病气であると判明したら。祖父母の体調が、急に悪くなったら。私は、どう行動したら良

第61回中学生作文コンクール

いのか見当もつかない状態でした。しかし、「家族は絶対に病気にならない」という先入観をなくし、そういった「最悪の事態」になったときのことを考えるきっかけをくれたのは、「母の病気」、そして何より、「生命保険」でした。

遺伝性のガンに、私もなってしまう可能性は、低くはありません。その事実が怖くて、認めたくなくて、「保険」を他人事だと思っていたのだと思います。しかし、だからこそ、私は生命保険に入り、自分になる可能性がある病気について知り、万が一のときに備え、自分を守る行動に移ろうと思いました。

自分の病気のことを知り、絶望してしまうのが怖いという理由で検診を受けたり、生命保険に入ったりしない人も少なくないと思います。この経験を通して、自分自身を知り、これからのことについて「病気」の面から考えていく必要があると気付かされました。そして、生命保険について考えることで、たくさんの方が救われる可能性が高くなる。そのことを、多くの人に伝えていきたいと思っています。